

---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 108

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



---

## 目次

- 2141. 組織開発の支援に向けて
- 2142. 究極的な自閉性と自開性
- 2143. 自由と死とトロヤの遺跡
- 2144. 技術的発達に劣後する私たちの内面的発達
- 2145. 内的感覚の変容と時系列データ分析
- 2146. 時系列データを用いた予測
- 2147. 学びと変化
- 2148. 創造行為の社会性
- 2149. インターン五日目の朝
- 2150. ミシガン大学に関する夢
- 2151. オフィスから帰宅して
- 2152. 社会人一年目の頃の記憶
- 2153. 何のための学びなのか？
- 2154. 自閉症という現代病
- 2155. 新年度への期待
- 2156. 巨大な墓石たち
- 2157. 『テール組織』について:組織開発への発達理論適用の注意点
- 2158. 今日の振り返り
- 2159. 時の顔
- 2160. 今朝方の夢と今日の活動

今朝方は何回か目を覚ますことがあったが、起床時の目覚めは全くもって悪くない。

一瞬一瞬という時間の粒子が自分の内側に堆積していくという感覚。それと同時に、堆積されていく時間がはっきりとした動きを持っていることを実感する。

平日が終わり、今日から休日を迎える。今日と明日の境界線が実は存在していないのと同じように、平日と休日の境界線も存在していない。そのため、土曜日である今日も、基本的に平日と同じように過ぎていこう。午前中に一件ほど日本企業との協働プロジェクトの仕事がある。それを終えたら、組織開発に関する書籍を読んできたいと思う。ただし、経営学の観点から組織の開発を捉えようとするのではなく、システム科学とネットワーク科学の観点、そして発達科学や教育科学の観点から捉えていく。前者二つに関しては、以前から探究を進めている領域であり、これらの領域の知識と組織開発の実践をつなげていく時期に差し掛かっているように思える。

システム科学やネットワーク科学の領域で蓄積されている種々の概念は、組織上の問題を整理・説明することにまずもって役に立つ。以前から関心を持っている組織の発達のみならず、ここ最近特に関心が強まってきている組織の病理的側面に関しても、それらのプロセスとメカニズムを説明し、打ち手を考えていく際に、システム科学やネットワーク科学の領域に蓄積されている様々な概念は非常に有効だろう。また、概念の活用のみならず、両科学分野に存在している諸々の分析手法を活用し、組織開発上の診断や課題分析を行うことも非常に有益だろう。二つの科学分野における概念と分析手法の双方を、これから徐々に組織開発という文脈で活用していくようにする。

一方、発達科学や教育科学についても同様のことを行っていく。ここでも、両科学領域に含まれる概念と分析手法を組織開発に適用していくことを今後はより意識していく。科学研究を単体として行うことには一種の虚しさが伴うことが多いが、科学研究を通じて獲得された知識と分析手法を実社会の具体的な課題の解決に向けて活用することには大きな意義を感じている。おそらく、自分が科学研究を継続させていくことの最大の意味はそこにあるだろう。今日からまた、特にシステム科学とネットワーク科学の探究を再開させたいと思う。

---

科学分野に関しては、少なくとも上記の四つの領域の探究を今後も継続させ、そこで得られた知見を実社会の課題、とりわけ企業社会の課題の解決に向けて適用する姿勢を絶えず持ち続けていく。  
フローニンゲン:2018/2/17(土)07:01

#### No.770: Human Conditions

Ernest Becker provides an insightful remark on human conditions. We have fear not only of death but also of life itself. Both life and death are threats for our existence. Then, how do we live and die? How can we overcome the dualistic nature of fear? Human conditions are very perplexing...  
Groningen, 19:57, Sunday, 2/18/2018

### 2142. 究極的な自閉性と自開性

システム科学、ネットワーク科学、発達科学、教育科学の四つの領域から、組織開発を含め、この社会に蔓延る課題の解決に向けて動き出すというのは、一つ自分に課せられている大切な役目のように思える。昨日、インターン先のオフィスの自室から外を眺めている時にそのようなことをふと思った。

発達科学の中でも発達心理学、その中でも成人発達理論に関して、私は長らく探究を行ってきた。教育科学の中においては、実証データから教育手法や教育プログラムの効果を検証していくことを目的とした実証的教育学は、まさに今私がフローニンゲン大学で探究していることに他ならない。昨年とはとりわけ、システム科学の中核を担うダイナミックシステム理論について探究を深めていった。

昨年の研究においてもダイナミックシステム理論の概念と分析手法を活用し、ダイナミックシステム理論に関するコースを履修するなり、様々な観点からダイナミックシステム理論の分野を探究していたように思う。現象をシステムとして捉えていくことの探究を進めているうちに、現象をネットワークとして捉えることも非常に有益であることに気づき始めた。そこから独学でネットワーク科学の探究を始めるようになったのは昨年のことである。これら四つの科学領域の探究は、内側からの要求事項に促されて進められているものである。自分の内側には、それら四つの科学領域の探究を推進していく促しがあり、それに駆り立てられる形で日々の探究が進んでいる。

---

今後組織開発の課題に取り組んでいく際には、当然ながら経営学の組織論に関する最低限の知識は必要になるだろう。しかし、私の貢献領域は経営学を通じたものではなく、やはり上記の四つの科学領域を通じたものになるだろう。この社会で自分の果たすべき役割というものが徐々に明確になりつつあることは喜ばしい。

昨日インターン先のオフィスの自室にいる時、自らの意識を極限まで内側に閉じさせ、そこから反動的に少なくとも地球規模にまで開放拡張させることが重要である、ということを考えていた。極度な自閉性と極度な自開性は両立しうる。そしてそれを成し遂げなければならない、ということ強く感じていた。その時の自分の頭の中には、日記や作曲実践という個人的な表現行為を極度に進めていくことと、科学研究とそこで得られた知見を社会の課題の解決に向けて適用するという社会実践とが完全に両立しうることであり、それを究極的な次元で進めていくことが大切だという考えが芽生えていた。

個人的な実践と社会的な実践の双方を、今日もまた推し進めていく。自らの意識が内側の究極的な一点に収束していき、そこから外側へ無限に開放されていく絵が意識の層に浮かんでいる。フローニンゲン:2018/2/17(土)07:23

#### No.771: Need for Eternity

Because I suppose that I am covetous of knowledge, does it mean that I may be enslaved by the need for power? Yet, the presumption of the statement is that knowledge is power. Is it so? It could be. Thus, I might be captivated not only by the need for power but also another type of need.

What is it? It could be the need for eternity. Knowledge is abstraction that can possess the quality of perpetuity. I may be seeking for it in my daily practice. Groningen, 20:07, Sunday, 2/18/2018

#### 2143. 自由と死とトロヤの遺跡

親友の祖母:「左手に自由を、右手に死を持っているところが素晴らしいわ」

---

小中高を共に過ごした親友の祖母が、私に向けてそのように述べた。

夢の中で私は、親友の自宅に行き、そこで彼の祖母と少しばかり話をしていた。その時に、親友の祖母は私の方を見て、私の左手に自由が宿り、右手に死が宿っていることを素晴らしいと述べた。

私には確かに親友の祖母の姿が見えており、彼女と話をしていたのだが、親友とその母には祖母の姿が見えていなかったようだ。どうやら、親友の祖母はすでにお亡くなりになられているらしいかった。

親友の祖母が目の前に現れ、そのような言葉をかけてくれたことを親友とその母に伝えると、二人の目には涙が浮かんでいた。同時に、私も幼少時代に親友の祖母にはお世話になっていたもので、自然と込み上げてくるものがあった。

親友の祖母が私に向かって投げかけた言葉の意味は一体何なのだろうか。左手に自由が宿り、右手に死が宿っているというのはどういう意味なのだろうか？

夢から覚めた今もまだそれについて考えている。自由と死は別個のものでありながらも、両者が自己の存在を通じて究極的な部分で結合を始めていることの示唆だろうか。

親友の祖母の言葉は強い印象を残していたのだが、実は起床した瞬間に、どちらの手にどちらの概念が付与されているのか一瞬困惑した。だが、一つ一つの概念を片方の手に感じてみようとするとき、やはり自分の内側には、左手に自由が宿り、右手に死が宿っているという感覚が正しいもののように思えた。

私の左手と右手に流れているエネルギーの質的差異を観察してみると、左手は平穏であり、右手は力強い。そうしたことから私は、平穏な死と力強い自由を対応させようとしていたのだが、実際にはその対応関係は逆のようだ。平穏な自由と力強い死。それらがどうやら自分の内側に宿っているようなのだ。

今もまだ親友の祖母の言葉が脳裏に焼き付いており、自分の両手に流れている異なるエネルギーについて内省をしている。

---

親友の祖母との対話の後、夢の中の私は列車に乗ってどこかに向かっていた。どうやらこの列車は欧州を走っているらしいことが窓越しから見える景色でわかった。

四人掛けの席に腰掛けている私の前にはドイツ人の女性が座っていた。するとその女性が私に声を掛けてきた。

**ドイツ人女性:**「知っていますか。トロヤの遺跡がこの辺りにあるんですよ。ほら、あそこです」

彼女の指差す方向には、深い森が広がっており、その森の奥に遺跡が佇んでいるのが見えた。

**私:**「こんなところに遺跡があったのですね」

**ドイツ人女性:**「もし行ったことがなければ、ぜひ一度そこに足を運んでみることをお勧めしますよ」

私は、視界から消え去るまで、その遺跡を窓越しからずっと眺めていた。「実在しないと言われていたトロヤの遺跡がこんなところにあったのか」と私は心の中でつぶやいた。

遺跡を発見し、それを眺めていた時の私の気持ちは、列車の外に広がる深い森のように静かであった。フローニンゲン:2018/2/17(土)07:43

#### No.772: Deception

Most of the modern people may be hypnotized somehow. Every news that derives from collective deception implies that we are always engaging in self-deception and collaborative deceit. When do we realize it, and how do we awake? The time has already come, hasn't it? Groningen, 20:12, Sunday, 2/18/2018

#### 2144. 技術的発達に劣後する私たちの内面的発達

今日は昼食前に、年始以降に日本で起こった仮想通貨を取り巻く種々のニュースについて調べていた。一連の出来事を見るにつけ、私たち現代人は常に技術的進歩の発達に大きく遅れをとる形で相変わらず未成熟な生き物なのだということを知る。仮想通貨に関する知識が個人の中で不足し

---

ていることのみならず、そもそも通貨の虚偽性に気づかず、それを盲目的に信奉し続けるという意識に何ら変わりはないようだ。仮想通貨は非常に高度なコンピューター技術の産物だと思うが、その産物を有効に活用できるほどの成熟段階に私たちはいない。

仮想通貨を取り巻く法律も昨年あたりから急速に進み、税金に関する法律も急速に整備されつつあることは確かだ。しかし、仮想通貨を取り巻く個人・集合の内外の四つの象限において、その技術的な進歩は今も日進月歩で進んでいるが、個人や集合の意識の進歩は軒並み劣後している。

「科学技術の進歩が人類を豊かにする」という標語を頻繁に見かけるが、私はいつもそうした言葉を疑いの目で見ている。科学研究を仕事にしている自分ですら—あるいはそうした仕事に従事しているからこそ—、科学技術の進展が人類を豊かにするなど安易に述べることなどできない。確かに科学技術の進歩のおかげで日々の生活が豊かになった面もあるだろうが、私たちが忘れてはならないのは、そうした技術を活用する私たち個人と集合の意識の未成熟さだろう。

人類の精神的な発達を歴史的に眺めてみれば、科学技術の進歩を手放しで喜ぶことなどできないことがすぐに分かるはずなのだが、といつも思う。赤ん坊は核爆弾を製造することはできないが、核のスイッチを押すことなら十分できる。仮想通貨に関しても全く同じである。高度な技術によって生み出されたものは、いかなる発達段階の者にいかようにも活用されうるということを忘れてはならない。

高度なコンピューター技術の産物である仮想通貨そのものは否定されるものではなく、むしろそれが誕生してしまったがゆえに、もはや私たちはそれを無かったものにするにはできないだろう。実際に、様々な種類の仮想通貨の特性について調べてみると、目を見張るような機能と可能性が秘められているものが多いことがわかる。しかし、そうした革新的な機能を活用する現代人自体がいかんせん無知であり、未成熟過ぎる点を危惧する必要があるだろう。

仮想通貨の誕生は、インターネットの誕生以来の出来事であると言われるが、もしかしたらそれ以上の影響を持つ出来事かもしれない。それは否定的・肯定的な意味での影響である。さらには、仮想通貨が人間の金銭欲と密接に結びついているということが、今後何かとんでもない惨事を私たちにもたらすことも十分に考えられる。確かマルクスが述べていたことだと思うが、カネを生み出したは



---

ずの私たちがカネに支配されるという状況は、仮想通貨と他の技術的産物の全般に当てはまることだろう。

私たちの内面的発達、常に技術的発達の周回遅れで進んでいるという事実を直視し、現代人は仮想通貨に振り回されているという現状を私たちは鑑みる必要があるのではないかと思う。フローニンゲン:2018/2/17(土)13:24

### No.773: Fetish and Individuation

In order to transcend our tiny ego, first of all, we have to overcome our fetish for authority. It might originate from our transference. We project our inferiority onto someone or something powerful than us. Unless we notice the origin of our fetish, we will never experience authentic individuation. Groningen, 20:19, Sunday, 2/18/2018

#### 2145. 内的感覚の変容と時系列データ分析

二月も終わりに近づいてきた日曜日の朝。今朝はいつもよりゆっくりと起床し、七時から一日の活動を開始した。これまではこの時間でも外は闇に包まれていたのだが、七時を迎える頃には辺りがうっすらと明るくなり始めていた。

一昨日、インターン先のオフィスから自宅に戻っている最中、日没の時間が随分と伸びていることに気づいた。オフィスから自宅までの道のりは、河川沿いのサイクリングロードであり、帰りは太陽が沈む光景をずっと眺めることができた。冬の夕暮れ時の空がもたらすあのなんとも言えない感覚をどう表現したらいいだろうか。

欧州での生活を始めるまで、季節の移り変わりがこれほどまでに豊かな意味を持っているものだと気づくことはなかった。より正確には、日々自分を取り巻く外側の世界の小さな移り変わりに目が行くことはあまりなかったように思う。

欧州での生活は、私の時間感覚のみならず、自然を含めた外部環境との接し方をも変化させたようなのだ。より大きな観点で言えば、変化する全ての現象を捉える内側の感覚器官に変容があったと言えるかもしれない。それほどまでに欧州での日々は、私の内側の感覚を変容させていった。

---

---

今日は晴れ後曇りとの予報が出ている。早朝のこの瞬間には、薄い雲がうっすらと空全体を覆っている。風はほとんどなく、通りに植えられた街路樹の枝が時折小さく揺れるぐらいである。

今週の最低気温は依然として軒並みマイナスを示しているが、それでも着実に春に近づいていることを実感している。日の出から日没までの時間が伸びたことがそれを示している。去年の経験上、この寒さは五月末まで続くだろうが、長かった冬が少しずつ終わりに近づき、花の咲き誇る新たな季節に向かっていることは確かだ。

今日は午前中に、アーネスト・ベッカーの“The denial of death (1973)”の残りの章を全て読み終えたい。本書からの学びは多く、今後も折を見て再読をするだろう。ベッカーの書籍を読み終えたら、研究で用いる時系列データ分析の方法に関する書籍とネットワーク科学に関する書籍に目を通す。これらは一度過去に全体を一読していたものであり、今日もまた全体を一読したい。

現在インターンで進めている研究は、時系列データの分析を進めるための豊富なデータがある。先日のインターンの際にも、どのような時系列データ分析を行うかを考えていた。

分析手法には様々なものがあり、研究の目的に応じて分析手法を選択することができる。今回の研究では、時系列データに潜む構造的パターンを明らかにしていくことに焦点を当てているが、今後は時系列データを基にした予測を行ってみたい。当然ながら、複雑な現象の完全なる予測は不可能なのだが、時系列データに潜む構造的パターンが将来にわたってどのように変化していくかの予測ならば随分と多くのことができる。時系列データを基にした予測は、私が従事している研究や実務で言えば、あるトレーニングプログラムがもたらす効果の動きを予測することが可能になるだろう。また、個人や組織の成長パターンを中長期的な時間軸で予測していくこともある程度可能であると考えている。時系列データの分析に関しては、自らの研究と実務で活用することを通じて、今後さらに力を入れて探究を進めていこうと思う。フローニンゲン:2018/2/18(日)07:36

#### No.774: Our Development and Self-Deception

I think that we have to expand ourselves when we develop, but how can we avoid self-deception and distorted self-aggrandizement in the process of development? It is a serious practical issue. Perhaps, the need for self-expansion is the lubricant for development, but it may also cause a

---

distortion of reality. I suppose that our development and self-deception are twins. Groningen,  
20:24, Sunday, 2/18/2018

## 2146. 時系列データを用いた予測

早朝に時系列データ分析について日記を書き留めてみると、時系列データ分析への関心がさらに高まったように思う。書くことは、時にその対象から離れることを促すこともあるが、対象に深く向かっていくことも促してくれるようだ。

時系列データ分析に関しては、本棚にいくつか専門書がある。時系列データ分析を実際に行う際には、Rというプログラミング言語を用いると非常に便利であり、私が持っている書籍も大抵、Rを用いた時系列データ分析について解説をしている。

昨日に本棚から取り出したのは、“Introductory time series with R (2009)”という書籍である。こちらには随分と多くの数式とプログラミングコードが記載されているため、これまであまり目を通したことがなかった。仮にこの秋から米国の大学院で客員研究員として所属することになれば、統計学科に所属している時系列データ分析の専門家に師事をしたと思っている。その教授から時系列データ分析の考え方や手法について学ぶ中で、おそらく数式に関する理解も深まっていくだろう。今日は本書を一読し、明日からの研究インターンで活用できるものは何かないかを探していく。

時系列データ分析について日記を書き、その中でも時系列データ分析を用いた予測について言及したことによって、本棚に“Practical time series forecasting with R (2016)”という書籍があることを思い出した。こちらはタイトルにあるように、時系列データを用いた予測に関する実践的な専門書である。こちらの本には、難解そうに見える数式はほとんどなく、説明記述が豊富にあり、適宜挿入されているRのコードを用いて、手を動かしながら時系列データを用いた予測方法について学ぶことができる。

以前から作曲とプログラミングには共通点があると述べているが、時系列データを用いた予測に関しても、実際のデータと向き合い、自らの手を動かしてプログラミングコードを書いていく実践が大切になるだろう。当初予定していた研究の進捗度合いによるが、研究インターンでの研究がうまく進めば、時系列データを活用した予測についても何かしらの観点から行ってみたいと思う。今回の研

---

究では時系列データが豊富にあるため、様々な分析を行うことが可能であり、それはとても喜ばしい。

ミハエル・ツシヨル教授の指導のもとに行っている研究では、すでに私の方でリサーチクエスチョンを立てているので、分析の観点はすでに決まっている。一方で、インターンで行っている研究は探索的な形で進めることをスーパーバイザーのジャン・ディエナム教授から許容してもらっているため、明日にデータのフォーマットが整えば、様々な可能性を模索する意味で多くの観点から時系列データの分析に着手したい。

今週の金曜日からは、インターン先のオフィスにRに関する書籍と時系列データ分析に関する書籍を数冊選んで持って行く必要があるだろう。来週からのインターンの楽しみがまた一つ増えたように思う。フローニンゲン:2018/2/18(日)07:59

#### No.775: The Nature of Modern People

Modern people may make a fetish of themselves, money, and any other cultural constructions. They are enslaved in the fabricated reality, blindly believing in an infinite number of social concoctions. Groningen, 20:34, Sunday, 2/18/2018

#### 2147. 学びと変化

今日は午前中から昼食前にかけてアーネスト・ベッカーの書籍を読んでいた。300ページほどの分量であるが、中身が濃いためか普段よりも一読に時間を要したように思う。本書を読み終えて、再度全体を眺めてみると、随分と下線を引いた箇所や書き込みをした箇所があることに気づく。それらは一旦断片的な気づきや知識として自分の内側で泳ぐことになるだろう。

良書は、認知的な刺激を与えてくれるのみならず、実存的な刺激も与えてくれるのだということを再確認した。ベッカーの優れた論考には随分と刺激を受け、個人と組織の内面現象を考察していく上で、本書を今後も参照することになるだろう。とにかく今は、本書によって得られた断片的な気づきと知識を一旦寝かせるようにしたい。

---

気づけば日曜日も夕方を迎え、今この瞬間にはフローニンゲンの夕日が美しく耀いている。夕方の五時を過ぎたが、数週間前であればこの時間帯は闇に包まれていたはずだ。来月末のサマータイムの開始に向けて、着実に日が伸びていることがわかる。

一昨日、インターン先のオフィスから自宅に戻っている最中、冬空の下にいと実に様々なことを思い、様々なことを感じるものだと思った。そして、私たちはいついかなる時も、この広大な空の下にいてを忘れてはならないと思った。いや、私たちはいついかなる時も自らを超越した何かの下にいてるのである。

日々の一つ一つの営みは、そこに向かう礎であり、一つ一つの営みは全てその抱擁の中にある。夕暮れ時の太陽が今日最後の輝きを強く発している。

欧州での二年目の生活も残すところ後半年ほどになり、これまでの自分と今の自分について少ばかり考えを巡らせていた。果たして自分は何かを学んできたのだろうか、果たして自分は何か変化を経験したのだろうか。そのようなことを考えていた。

これまでの日記の中で、欧州で学んできたことや経験した変化についてつぶさに書き留めてきたつもりである。しかし、果たしてそれらが本当に自分が学んできたことや変化してきたことなのかは定かではない。もっと重要な学びや変化があったように思えてきたのである。

学びや変化について記述をした瞬間に、私はその学びや変化の外に出る。重要なことは、学びや変化が生起する場所の中に生き続けているということであり、学びや変化を絶えず経験する主体への気づきの意識が芽生えたことにあるのではないかとふと思った。つまり、欧州での生活を通じて得られた学びや変化そのものが重要なのではなく、学びや変化が生起する場所の中に絶えず自己を据え続け、学びや変化を経験する自己そのものへ気づきの意識を与え続けることができるようになったことが重要なのではないか、ということである。

ゲーテはかつて、経験の中に浸り切り、経験の最奥から内省を行うことの重要性を説いた。私が欧州での日々を通じて得たものは、そうしたことに近いかもしれない。

---

一つの経験を究極的なまでに主観的かつ客観的に捉えること。そのプロセスが自己の内側で確かに起こり始めている。そしてそれは、欧州での生活が一日一日と経つにつれて着実に深まっていく。フローニンゲン:2018/2/18(日)17:20

#### No.776: A Drop in The Mighty Ocean

I'll leave my house soon to go to the internship office. I feel that today is like a precious drop in the vast ocean. Groningen, 08:42, Monday, 2/19/2018

### 2148. 創造行為の社会性

夕食を摂り終え、これから一日が終わりに向かっていく。今日はアーネスト・ベッカーの書籍と時系列データ分析の書籍を読み進めた。両者は全く異なる学問分野の書籍だが、今の私の日常は絶えずこのように全く異なる分野の専門書と論文を読み進めることで形作られていく。それは学術的な探究のみならず、実践領域においてもそうである。

日本企業との協働プロジェクトを進める傍らに科学研究を行い、その合間合間に作曲実践や日記の執筆を行っている。今日は日曜日ということもあり、二曲ほど新しい曲を作ることができた。以前の日記で書き留めたように、少なくとも向こう三年間は、過去の作曲家の作品に範を求めながら曲を作っていく。今日もそのような実践を行っていた。

大変興味深いのだが、他の作曲家の作品に範を求めていると、彼らのモチーフに驚かされるだけでなく、彼らが生み出したモチーフを元に生み出した自分自身のモチーフに驚かされることがある。自分が生み出したモチーフに驚かされるというもおかしな話かもしれないが、作曲にはそのような要素がある。つまり、自分の意図を超えて、内的現象がある形を持って外側に表出されることがあるのだ。そうした光景を見るたびに、私は生み出された産物に対して感嘆の声を上げる。

これは今まで繰り返し述べていることだが、他の作曲家に範を求めながら曲を作ることは、いつも大きな刺激と学びにつながる。自分の発想の枠組みにないようなアイデアが常にそこに具現化されている。今は本当に多数の作曲家に範を求めており、これを数年間ほど継続させていけば、一人一人の作曲家の思想や個性がより明確に体感として捉えることができるだろうし、彼らの作曲技術を

---

自由自在に応用させながら自分の曲を作っていくことが可能になるだろうと期待している。そのようなことを考えてみると、創造行為というのは、常に他者の創造行為の上にあることに気づく。他者の作品に触発され、啓蒙される形で自らの創造行為がある。

他者の創造行為を母体にして自らの創造行為があるのであれば、創造というのはつくづく社会的な営みに他ならないことがわかる。とにかく過去の作品を土台にして、絶え間なく新たなものを生み出し続けていこうと思う。創造行為が内在的に秘めている社会性を理解し、実際に創造行為に従事し続けることが創造能力を高めることの最善の方法だろう。フローニンゲン:2018/2/18(日)19:48

#### No.777: The Fifth Day for the Internship

Today is the fifth day for the internship at RUG. I finished formatting the half of the data sets last Monday. Although it took more time than I expected, it is almost done. I'll continue to work on it from now; there remains the data for only two weeks of the investigated MOOC. Probably, I can complete it before 15:00. Then, I'll write some programming codes for data analysis. Groningen, 13:17, Monday, 2/19/2018

#### 2149. インターン五日目の朝

今朝は六時を少し過ぎた時間に起床した。新たな週がまた今日から始まった。

昨日の段階では、天気予報によると今日は夕方から雨のようだった。しかし幸いにも、今朝方天気予報を確認すると今日は終日晴れようだ。今日は早朝から研究インターンのためにオフィスに脚を運ぶ必要があるため、晴天であることはとても喜ばしい。

インターン先のオフィスに行く前に、今日どのようなことを行うのかを事前に確認しておきたい。今日は真っ先に、先週末に取り組んでいたデータの整理の続きに取り掛かる。具体的には、研究対象にしているMOOCのレクチャーのトランスクリプトを全てエクセルに移し、プログラミング言語のRを用いた分析ができる状態にしておく。厳密には、トランスクリプトは全て定性データであるため、Rを用いた統計分析や時系列データ分析を行うためには定量化をする必要がある。

---

定量化の基準は、インターンの最初の週に作っているため、あとはRのプログラミングコードを書けば良いだけである。今日はとりあえず、プログラミングコードを書く前の段階まで完成させることをめどにする。およそ半分ほどの講義のトランスクリプトをエクセルに移し、データのフォーマットを整えていく必要がある。そのため、午前中と午後の半ばまでこの作業に時間を要するだろう。

もし仮にこの作業が早めに完成し、インターンのリフレクションジャーナルを執筆しても時間が残っていれば、Rのプログラミングコードを書き始めたいと思う。プログラミングコードに関しては特に誰かに習ったわけでもなく、現在誰かに師事しているわけでもない。これまで、全て研究や仕事の必要性に応じてRの技術を少しずつ高めてきた。今もそうした状況は変わらず、研究課題をこなすために必要なコードがあればそれを書けるようにし、仕事上でデータ分析を行う際に必要なコードがあればそれを書けるようにするというスタンスでRと接している。

プログラミングコードを書くことは私にとって全く苦ではなく、むしろ作曲と同じぐらいに充実感をもたらす。作曲をしていて、自分が生み出した音の配列が綺麗な音色を奏でる瞬間に立ち会い、そこで喜びを感じるのと同様に、自分の書いたプログラミングコードがうまく機能した時にも同種の喜びの感情が芽生える。そうしたことから、研究や実務においてRを活用する機会があるというのは私にとって喜ばしい。

今日はRに関する専門書を持参する予定はないので、データの整理が早く終わり、プログラミングコードを書ける時間的余裕があれば、熟達したプログラマーが集まるウェブサイトの情報をもとにコードを書いていきたいと思う。すでに何を目的に、どのようにデータを分析したいのかが明確なため、必要なコードの書き方はウェブサイトに記載があるだろう。本日のインターンも充実したものになりそうだ。フローニンゲン:2018/2/19(月)07:16

#### No.778:Application of network analysis

This is a memo for my future research. After collecting the data, I realized that the data size was quite huge in a positive sense. I can apply any nonlinear dynamics techniques to the ample amount of data. In the near future, I want to examine MOOCs from network science perspectives. For instance, learners from all over the world construct a learning network by communicating with one another on the online comment platform.



---

The frequency and density of the communication varies over the course. Here, I want to capture the network-like characteristics of learners' online activities on the MOOC platform. The shape and nature of the network varies over the course. The purpose of my future research is to capture such a network-formation process in the MOOC environment. Groningen, 13:25, Monday, 2/19/2018

## 2150. ミシガン大学に関する夢

時刻は七時を迎え、フローニンゲンの早朝の空がダークブルーに染まり始めた。いよいよ夜が明ける。日の出の時間が早くなり、日の入りの時間が伸び始めていることを以前の記事に書いていたように思う。日照時間が長くなるというのは嬉しいことである。一方で、寒さに関してはまだまだ厳しい。先週一週間、そして今日明日は比較的暖かいが、明後日以降からまた寒さが厳しくなる。来週の今日は最高気温ですら0度である。気温に関してはまだまだ変動が激しく、それでいて寒いことを念頭に置いておく必要があるだろう。

ゆっくりと、それでいて確かに明けていく早朝の空を眺めながら、今朝方の夢について思い出していた。起床直後、その瞬間まで見ていた夢の印象が強く残っていた。

夢の中で私は、米国のミシガン大学に通うことになっていた。なぜこの大学に通うことになったのかは全く定かではない。

この大学のキャンパスの作りは変わっており、地下鉄駅と直結して大学内に入ることができる。ちょうど私はキャンパスと地下鉄駅の連絡道の上に立っていた。連絡道を行き交う人たちは一般人も混じっているが、ミシガン大学に通う学生が圧倒的に多い。

私は大学生らしき米国人に声をかけ、どこから大学のキャンパスに入っていけばいいのかを尋ねた。するとその米国人は親切に道を教えてくれ、進むべき方向を指差した。指が差された方向を眺めてみると、ミシガン大学を宣伝するポスターが連絡道の両脇に大量に貼られている光景を目撃した。さらに、連絡道の蛍光灯がミシガン大学の大学カラーに点灯し始めた。

---

点灯する光の方向へ歩き出してみると、連絡道の壁には、これまでミシガン大学が取得した特許の数々が紹介されていた。それらのほとんどは企業社会における特許のようであり、中には非常に有名な製品やサービスに使われている特許もあれば、私が全く知らないようなものもあった。そこで私は、もしかすると自分はミシガン大学に経営学を学びに来たのではないかと思った。

自分が今ここにいる理由がおぼろげながら見えてくると、少しばかり複雑な気持ちになった。どうして私は経営学を学ぶ必要があり、その中でもミシガン大学に来ることになったのか。それらの理由については未だに不明であり、腑に落ちないものがあった。

相変わらず連絡道を行き交う人の数は多い。私はぼんやりと人の流れを眺めており、気づけば夢の場面が変わっていた。その直後に見た夢の内容は、起床直後の時点ではとても強く印象に残っていた。しかし残念ながら、その夢はもう記憶の中から滑り落ちてしまった。

夢というのはチャンスと同じで、一度掴み損ねると逃げていくものであるかのようだ。掴める時にそれを掴んでおく必要があるというのは、何もチャンスや夢に限らず、私たちの内側に生じる貴重な内的現象もまたそうだろう。フローニンゲン:2018/2/19(月)07:39

#### No.779: System Science and Network Science

I've had been intrigued for a long time by the investigation and support for individual and organizational development from system science and network science perspectives.

The more I spend in the academic environment in the Netherlands, the more my interest in the two scientific domains increases. Although I have affection for philosophy in various domains, I know that scientific knowledge and approaches are valuable for me to engage in grappling with social issues.

Since any social issues can be regarded as systems and networks, I incline my learning and practice to system science and network science. Perhaps, it takes a couple of years so that I can apply my knowledge and skills in those fields, but I'll continue to delve into those scientific

---

domains. I may obtain two PhDs; one is about system science, and the other is about network science. Groningen, 13:37, Monday, 2/19/2018

### 2151. オフィスから帰宅して

インターン先のオフィスから自宅に戻ってきて、夕食を摂り終え、ようやく一息ついた。インターン先では日本語で文章を書き留めておく余裕が一切なく、今日もあっという間に時間が過ぎていった。

オフィスに到着し、午前中から集中してデータの整理に取り掛かり始め、昼食前の段階において、それは予定通りの進行であった。この調子であれば夕方には少し次の作業に取り掛かれると思っていた。しかし蓋を開けてみると、データの整理に丸一日かかってしまった。これは午後からの作業ペースが落ちたわけでは決してない。午後からも集中してデータの整理に取り組むことができたのだが、データ量がいかにせん多かったのだ。

結局今日は朝から晩までデータの整理に追われることになった。ただし、今日中にそれが終わったことには一安心している。一応当初の研究計画では、今日中にデータの整理を終えることになっており、計画通りといえば計画通りだ。

データの整理を終えてみて、合計のデータポイントを数えてみると、3000を超えていた。今回の研究ではある一つのMOOCを対象に、その講義部分のトランスクリプトを主要なデータとして用いる。エクセルに落とし込まれたのは、3000個のセンテンスである。仮にこの数のデータに対して、昨年のようにカートフィシャーのダイナミックスキル理論のレベル尺度を活用しようと思うだけでゾッとしてしまう。

昨年の研究では、合計のデータポイントが250個ほどであったため、なんとかそれら全ての言語構造に対してレベル測定ができたのだが、さすがに3000個のデータに対してそれを行うことは困難である。もちろん今から数年後には、この辺りの測定もAIを実装すれば十分に可能であると思っている。それが実現されれば、おそらく、ほぼ一瞬にして3000個のデータのスキルレベルがわかるだろう。しかし、今はまだそうした時代ではないため、人間が手作業で構造分析をしていかなければならない。

---

今回の研究では、フィッシャーのダイナミックスキル理論を活用するのではなく、別の定量化基準を設けた。研究アドバイザーのミハエル・ツショル教授の知見を借り、より簡易的な三つの基準で定量化を行っていく。定量化基準についてはここでは割愛するが、次の金曜日にオフィスで研究をする際には、定量化基準をプログラミングコードに転換していく。

以前にツショル教授から参考となるコードを送ってもらっており、その時に一度目を通し、どのようなコードを書けば良いのかのイメージはすでにある。金曜日は、このイメージを実際のプログラミングコードの形にする。

兎にも角にも、3000個のデータの整理は大変であった。先週から今週にかけて、オフィスの自室に籠もり、ほとんど人と会話することなく、黙々とデータの整理を行っていた。

振り返ってみると、本日になされた他人との会話を全て洗い出してみると、インターンのスーパーバイザーを務めるジャン・ディエナム教授と早朝にオフィスの階段ですれ違った時に“Good morning”と述べたことと、インターンの帰りに立ち寄ったスーパーで、店員に“Goedenavond(こんばんは)”と述べたのと、店員からの“Bonnetje mee?(レシートはいりますか?)”という問いかけに、“Nee hoor(いえ、いりません)”と答えただけだった。とはいえ、そもそも人間と言葉を交換するというのも数日に一回あるかないかなのだが・・・。

とにかく今日は無事にデータの整理がひと段落して良かったと思う。金曜日からのプログラミングによるデータ分析が楽しみではない。フローニンゲン:2018/2/19(月)19:52

#### No.780: Covetous Mind for Knowledge

As I mentioned a couple of days ago, I may still be enslaved by the needs for knowledge. They might be related to my desire to seek for eternity.

New knowledge begets new one. At the same time, the new knowledge may amplify my needs for knowledge... Does knowledge acquisition help me to overcome the covetous mind for knowledge? I'll test it through the continuous knowledge construction. Groningen, 14:03, Monday, 2/19/2018

---

## 2152. 社会人一年目の頃の記憶

今日はとにかくインターン先のオフィスにいる時はデータの整理しかしていなかった。常にパソコン画面とにらめっこをして黙々とデータの整理をしていたが、時には意識的に自室の窓から外を眺めた。

今日は早朝は曇り気味だったが、オフィスに到着した頃には少しずつ太陽が顔を覗かすようになり、冬の優しい日差しが地上に降り注いでいた。私は自室の窓から誰もいないサッカーコートを眺めていた。頭の中で何回か視界に映っているサッカーゴールにシュートをした。サッカーもバスケも随分とご無沙汰であるが、今でも暇さえあれば頭の中で両競技をすることがある。インターン先のオフィスでも、息抜きにそのようなことをしていた。

午前中のデータ整理を終えて、キャンパスの敷地内にあるスーパーに昼食を買いに行こうとした時、ふと前職時代にお世話になったシニアマネジャーの顔が脳裏をよぎった。新卒で入ったコンサルティング会社でその方には本当にお世話になった。

私とその方とは親子ほどの年齢差があったが、同時期に会社に入社したこともあり、入社時の研修を一緒に受けることになった。それからその方には随分と可愛がってもらい、二人だけであるプロジェクトを担当する機会も得た。

仕事以外にも、会社帰りに一緒に通天閣に上りに行き、その後新世界で串カツを一緒に食べたりもした。二人とも東京から大阪にやってきたため、大阪の観光名所にはあまり行ったことがなく、休日に一緒に出かけたこともあった。

実は、私が啓示的なメッセージを受けて、経営コンサルティングの領域から離れ、発達科学の領域に足を踏み入れるきっかけになったのは、その方と一緒に訪れた京都にあるクライアントからの帰りの道でのことだった。今でもあの瞬間のことは鮮明に覚えている。その日を境に留学しようと決心し、留学について最初に相談したのもその方であった。その方に素晴らしい推薦状を執筆していただいたおかげもあって、私の米国留学が実現したと言える。それはもう今から八年も前のことである。

---

留学後から現在にかけて、その方とは何回かメールでやり取りをした。最後に連絡をしたのは今から二年前に、私が最初の書籍を出版した時だった。

その方に連絡をしてみると、その方は既に退職をし、退職を機に以前からの望みであったロースクールに入学し、連絡を取った時は司法試験に向けて勉強中であるとの連絡が来た。

「小生、司法試験の受験生です。小生歳のせいか、物覚えが悪く、色々難儀しております」というユーモアのあるメールをもらった。

私は留学を決意するまでは、毎朝早くオフィスに行き、仕事関連の勉強をしていた。大抵私の出社はオフィスの中で二番目であり、そのシニアマネジャーの方が常に一番に出社し、机で勉強をされておられた。

その方が熱心に机に向かっている背中を私は毎朝見ている。プロジェクトの兼ね合いで、私が休日に出社する必要があった時も、その方はオフィスで勉強していることがあった。

「いや～、家とオフィスが近いものでね。家よりもこの方が集中できるんだよ」とその方が述べていたことを今でも鮮明に覚えている。

その方は定年退職をした後にロースクールに入学し、二年前に法科大学院を修了された。もう司法試験には合格されたのだろうか。

昼食を買いに、キャンパス内のスーパーに向かって歩いている最中、その方との思い出ばかりが脳裏に蘇っていた。社会人一年目の私に対して、その方は毎朝笑顔で、「おっ、加藤君、勉強しとるね」と話しかけてくれていた。おそらく私は、人生を終える最後の日まで、その方との当時の交流を忘れることはないだろう。フローニンゲン:2018/2/19(月)20:23

#### No.781: A Run of Time

Time has passed in my life very quickly as if it were running. Time in my life is sometimes walking and stopping, but I now feel it running. Groningen, 12:01, Tuesday, 2/20/2018

---

### 2153. 何のための学びなのか？

絶え間ない学びを希求する自己と、巨大かつ堅牢な知識体系を内側に構築し続けようとする自己の問題についてここ数日ばかり考えていた。その問題を提起したのは、アーネスト・ベッカーの書籍である。ベッカーの書籍の中に直接的にその問題が扱われていたわけではない。ベッカーの記述をもとに、私が自らを省みてなされた問題提起であった。

知識という抽象的な産物を絶え間なく求めようとする行為と、本質的には単なる抽象記号に過ぎない金銭を求めようとする行為は全く同じなのではないか、という問題提起が自分の中にあった。どちらも自己の生命の有限性からの逃避と密接に関わっており、死の拒絶の表れなのではないかと考えるようになった。

そもそも、金銭にせよ、知識にせよ、それらは抽象的な産物であり、それらが抽象的な記号であるがゆえに無限に増殖しうる。その点において、無限なものを盲信的に獲得し続けようとする自己はもしかすると死からの逃避を行っているのではないか、と思ったのだ。

私の中では、金銭の虚偽性については知的理解のみならず、金銭の呪縛からほぼ脱している状態に至っていると思うようになっていた。だが、知識に関しては話が別であった。金銭も知識も似た性質を持っており、どちらも永遠を求めようとする人間心理を駆り立てるものであり、どちらもある種の権力と密接に関わったものであるという気づきが芽生えて以降、飽くなき学びを継続する自己に対して検証の目が向かった。

本格的な検証の目が向かったのは、まだ数日前の出来事である。しかし、その問題提起に対して、私はその指摘の正しさを部分的に認めながらも、断固として学び続けるという姿勢を崩さないことにした。この姿勢が死の拒絶だと言われようが、永遠性への飽くなき希求だと言われようが、それらは全く問題ではない。ただし私は、自らの生涯を賭けて学び続けようとする姿勢に対して一つだけ条件を付した。仮にその姿勢が、一個人の死からの逃避から生まれたものであり、有限な人間存在が持つ叶わぬ永遠性への希求から生まれたものであっても良いのである。私が課した条件は、とにかく獲得・構築された知識をもとに社会参画せよ、というものだった。

---

人生を賭けて獲得・構築した知識をもとに社会に関与し続けるという条件を自らに課したのである。とにかく人生の最後の瞬間まで、私は学ぶことをやめないだろう。それが死の拒絶であったとしても、知の獲得による権力欲の充足と密かに結びついていたとしても、そうしたことが絶えず付きまとうのが人間の性なのではないだろうか。自らのそうした側面、すなわち人間としての条件というものを冷徹に認めなければならない。その条件の上に、自ら課した条件を付加するのである。

学び続けるというのは、社会へ参画し続けるということの表れに他ならず、そうでなければならない。でなければ何のための学びなのだろうか。フローニンゲン:2018/2/19(月)20:42

No.782: “Introductory Time Series with R (2009)”

I finished reading “Introductory Time Series with R (2009).” The book is quite useful for my current research because I plan to apply time series analysis. Although this book presents a number of mathematical equations, the explanations are clear. This book enabled me to acquire basic concepts of time series analysis and to solidify my previous knowledge on the subject.

Groningen, 15:52, Tuesday, 2/20/2018

#### 2154. 自閉症という現代病

独り、独り、独り。世界のどこで何をしようが、自分が独りだという意識が時に噴出する。

自分が究極的に独りであり、独りであることは逆に独りではないのだということに気づいている自分がいるのは確かだ。

自己と他者および世界との関係に関する問題。欧州での生活の中でその問題はもう何度も考えたはずだ。だが、今日もまたその問題に向き合っている自分がいる。

今日を生きる中で、自分の認識世界に入り込んだ人たちを一体どのように捉えたらいいのだろうか。彼らとの関係性をどのように捉えたらいいのだろうか。母国にいても、世界のどの国にいても、意識ある自己が生きている空間において、私は独りであることを強く突きつけられる。



---

自己と世界との究極的な一体感を時に得ることがあるのは確かだ。だが、それは私の日々において絶えず起こっているわけではない。日常の大半は、私は小さな自分の自我の世界の中に閉じこもった形で生活をしていることを認めなければならない。

今日、インターン先のオフィスからの帰り道、近くの河川敷沿いのサイクリングロードを歩いていた。まだ日が暮れておらず、夕日が残った青空に飛行機雲が浮かんでいた。それは私の中で、“perception 1”と括られた。それ以降、視界に入る全ての物・人が、“perception N”のオーダーで括られていった。すれ違う人や河川の上を飛ぶ鳥、河川敷に咲く草木も“perception”に過ぎなかった。そしてあろうことか、最後には、私自身も“perception”とみなされるようになった。そこで私はもう一度、広大に広がる空を仰ぎ見た。するとそれは“perception”で括られることなく、何も名の付けられぬ存在としてそこにあった。

今はそれを「空(そら)」だと述べることができるが、その時の私には、その空なるものは「空(そら)」ではなかった。名前のない、あるがままの裸体としての存在がそこにあった。それはもしかしたら、「空(くう)」と呼ばれるものなのかもしれない。

河川敷を歩きながら、自己の孤独性と自閉性について考えていた。そういえば、今日はオフィスでデータ整理に没頭している最中に、一度ふと、学術コミュニティの閉鎖性について憤りを感じていたことを思い出した。

「自閉的な専門馬鹿は馬鹿にすぎないが、領域を超えた対話のできる専門馬鹿は馬鹿ではない」という考えが脳裏をよぎっていた。そこから思考が広がり、学術世界の人間を見るにつけ、どうしてこゝも自閉的な人間が多いのだろうか、というある種の自らの心理的投影とも呼べるようなことについて考えていた。自らの専門領域から一歩外の領域に足を踏み出すことのできない人間や、領域を自由に越境して対話と協働を行える人間が少ないのはどうしたものかと考えていたのである。

結局、学術世界にしようが、企業社会にしようが、多くの人間は自閉的であり、その世界での言語世界しか知らず、その言語固有のルールと限界に盲目的過ぎるのではないだろうか。自らの自閉的側面は認めることができるが、結局は、現代人の多くはどの領域にしようとも多分に自閉的な

---

ではないかと思う。現代の多くの社会的な病の根源はこうした自閉的な側面にあるのではないだろうか。フローニンゲン:2018/2/19(月)21:01

### No.783: Distributed Intelligence

I came up with a question: Can we alter or manipulate distributed intelligence in society?

Ants seem intelligent, but they are not exactly so because their behaviors are just derived from a path generated by distributed intelligence. Here, if someone changes the path, the behaviors of all ants are altered. Groningen, 17:20, Wednesday, 2/21/2018

### 2155. 新年度への期待

今朝は五時半過ぎに起床し、六時から一日の活動を開始させた。昨日のインターンを終えて、今日から次回にオフィスに行く金曜日にかけてはまた独自の探究活動に従事していく。今日はネットワーク科学、システム科学、時系列データ分析に関する専門書に目を通したいと思う。

昨日のインターンでは、無事にデータ整理を終えることができた。これをもってして、いつからでもデータ分析に入ることが可能になった。

今朝起床直後にお茶を入れていた時、整理したデータを早く分析したいという衝動が起こった。プログラミング言語のRを用いて、プログラミングコードを書き、それを元にデータ分析を次々と進めたいという衝動が不意にやってきたのである。しかし私はそうした衝動に基づいて行動をしないようにした。

衝動的に行動を取ることが必要な場面もあるのかもしれないが、自分の研究に関しては衝動的に向き合うのではなく、とにかく継続的かつ計画的に向き合うことにしたいという思いが強い。衝動的に研究を進めれば、どこかで必ず反動が生じる。その反動は往々にして疲弊と結びついている。そうした反動と疲弊を避けるために、自らが事前に立てた計画に基づいて、継続的に研究と向き合っていくことが大切になるだろう。

---

プログラミングコードを書きたいという自分の気持ちを理解することができるし、データ分析を様々な観点で行っていききたいという気持ちも理解することができる。しかし、あえてそうした気持ちに迎合しない形で研究を進めていく。

金曜日にオフィスに行き、楽しみにしているそれらのことに従事している自分の姿を頭の中でイメージすることができる。楽しみを先延ばしにし、そこに向けて気持ちをさらに高めていくことが必要な場面もあるだろう。

今日は午前中に一件、昼食後に一件ほど、日本企業との協働プロジェクトに関する仕事がある。どちらのプロジェクトも三月末で一旦形となる。ここから一ヶ月間は最後の追い込みの時期になる。あと一ヶ月ほどで年度が変わる時期を迎えるというのはどこか感慨深い。

私の内側には、日本で培われた年度が変わることの意味がまだ染み付いている。日本を離れて生活をしてきたとしても、新たな年度を迎えると、少しばかり新鮮な気持ちになるから不思議だ。三月末日と四月一日の間には、非線形的な何かが隠れているようだ。三月末に向けて協働プロジェクトを詰めていくことに力を注ぎ、四月からの新たな始まりに期待したい。今年はまだ自分の人生に大きな動きがあるだろうし、新年度からその潮流は加速しそうだ。

書斎の窓から見える早朝の闇は実に清々しい。フローニンゲン:2018/2/20(火)06:21

#### No.784: Cognitive Artifacts

Cognitive artifacts are omnipresent in our society. They are almost everywhere. Cognitive artifacts sometimes reduce our cognitive loads, but at the same time, they sometimes manipulate our cognition. I think that every object and symbol plays a role of cognitive artifact.

How many people can notice that our perception and cognition are affected by abundant cognitive artifacts in our society? Groningen, 17:27, Wednesday, 2/21/2018

---

## 2156. 巨大な墓石たち

今朝方、印象的な夢を見ていた。夢の中で私は、小中高と仲の良かった友人の自宅へ向かっていた。その友人の自宅は山の中にあり、私はバスに揺られながらそこに向かっていた。バスの中を眺めると、そこには何人かの友人が乗車しており、彼らもその友人の家に向かっていることがわかった。

私はその中から一番近くの席に座っている友人に話しかけた。すると、その友人は口を開いて一言述べた。

**友人:**「最初にあそこの広大な墓地からどうやって彼の家に行ったらいいのか迷ったもんだよ」

窓越しに友人が指差す方向を眺めると、大きな墓地が広がっていた。山が切り開かれ、そこに広大な墓地が不気味に佇んでいた。

墓地に置かれている墓石は大小様々なものがあったが、バスの進行方向の墓地を眺めると、遠くに巨大な墓石群が乱立していることがわかった。

**友人:**「ほら、あそこ。すごい大きな墓石だよね」

幅も高さも、これまで見たことのないような大きな墓石が、地球のへそに向かっていくつも突き刺さっているように私には見えた。それは立派な墓石と言えそうだが、そのあまりの大きさに圧倒されてしまうのも確かだ。

**友人:**「ここの標高は1,000mもあるんだよね。それにしても彼はよくこんな場所から毎日学校に通っていたなあ」

友人がそのように述べると、バスが静かに停車した。私たちは巨大な墓石の見えるバス停で降り、そこから歩いて友人の家に向かうことにした。

片側に巨大な墓石のある墓地があり、もう片側には山道がある。私たちは山道を歩きながら、時折特徴的な墓石を指差しながらそれについて話をしていた。

---

---

すると突然、山道に巨大な黒い影を見た。よくよく目を凝らして見ると、なんと巨大な墓石が人の形となって山道をゆっくりと歩いていたのである。そのうちの一体は、ベートーヴェンの姿をしており、あの特徴的な髪型まで石で表現されていた。

墓石たちはゆっくりと山道を歩いて行き、私たちはそっとその後をつけるかのように歩いていた。ふとしたところで、墓石たちのいくつかが後ろを振り返り、私たちの方を見た。するとそれらは本当に人の形をしているが、改めてその巨大さを思い知ることになった。

墓石たちは一旦立ち止まって私たちの方をじっと見たが、再び振り返り、何事もなかったかのようにまた歩き始めた。するといつの間にか墓石たちの姿が見えなくなり、私たちは山間にあるレストランに到着した。そこには、私たちが先ほどから向かっていた家の友人がすでにおり、彼と合流する形でレストランの中に入った。

そのレストランの店員は友人でもあったから、店内に入った時に私たちは何かしらの冗談を述べて、和やかな雰囲気になった。ところが、レストランの席に腰掛けると、すぐに私は種々の不幸な知らせを聞いた。それは墓石や墓地が象徴する人間存在に不可避の現象の一つに関することだった。悲報の一つ一つを冷静に受け止めている最中に夢から覚めた。

先ほど清々しく見えた早朝の闇がまた違った意味をまとっているように見える。闇は闇のままであり、闇は闇として常にそこにあるのだ。フローニンゲン:2018/2/20(火)06:43

#### No.785: Distributed Intelligence and Collective Intelligence

I found a slight difference between distributed intelligence and collective one. The former is a property of the individual in the environment, whereas the latter is a property of collectives in culture. Also, the former is much more localized in that it is manifest in a certain environment.

In the context of learning, I imagine that it would be much easier for us to intervene in the former by altering learning designs and environment. Groningen, 17:34, Wednesday, 2/21/2018

先日お世話になっている編集者の方から一通のメールが届いた。どうやらここ最近、ビジネス書を扱う大手の出版社は「組織開発」の領域に着目をしているらしく、関連書籍の出版に向けて現在力を入れているようだ。

私も組織開発には関心を持ち続けているが、今は自分の研究と日本企業との協働に専心する時期であるため、組織開発に関する書籍の出版は待ってもらうことにした。

組織開発は経営学の言語体系で語られることが多いだろうが、ここ最近では発達心理学、とりわけ成人発達理論の観点から語られるようになってきている。組織開発を複数の学問領域から議論していくことは非常に有益だと思われる。

一つ一つの学問領域には、開示される真実が異なるため、複数の領域から組織開発を捉えていくことは、その理解と実践を豊かにするだろう。そうしたことを踏まえると、発達心理学の観点から組織開発が語られるようになってきているというのは、日本の企業社会にとって意味のあることだと思う。

私は、そうした潮流を生み出すような大変意義のある仕事をしている代表的な出版社は英治出版さんだと思う。成人発達理論の大家であるロバート・キーガンの書籍を今から五年前にいち早く出版したことを皮切りに、近年も立て続けに成人発達理論に関する良著を翻訳出版されている。日本の企業社会に発達心理学の言語体系を紹介してきた功績は非常に大きなものがあると思っている。また、それらの書籍を翻訳した翻訳者の方たちの貢献も忘れてはならないだろう。

ただし、発達心理学の枠組みが企業社会に認知され始めているこの時期において、私たち読者側に求められていることがあるということをしつぱかり手短かに書き留めておきたい。組織開発へ発達理論を適用する際にはいくつかの注意点がある。

私はこれまで、『ティール組織』で言及されている成人発達理論を八年ほど探究しており、今はオランダのフローニンゲン大学でその研究を続けている。私が最初に成人発達理論を本格的に学んだのは、退職後に留学した米国のジョン・エフ・ケネディ大学でのことである。その時に私は、『ティール

---

ル組織』で適用されているドン・ベックのスパイラルダイナミクスモデルやケン・ウィルバーの理論を熱心に学んでいた。

とりわけ、個人や組織の発達を議論する際に気をつけなければならないのは、発達というものが私たちが思っている以上に長大な時間を要するという点である。個人の発達はさることながら、組織の発達となれば個人以上に発達の速度は緩やかである。

成人発達理論に関する一般書を読む際に気をつけなければならないのは、そこに記述されている段階モデルを眺めた時、次の段階に移行することが速やかになされると誤解しないことである。例えば、『ティール組織』で適用されているドン・ベックのスパイラルダイナミクスモデルを用いて日本の集合意識の発達過程を考えた場合、少なくともこの数十年間はアンバー段階のままで留まっている。さらに少し時代を遡ると、軍国主義がはびこっていた戦時下においては、レッドとアンバーの複合段階に日本の集合意識はあったであろう。それを考えると、この百年の間に、日本の集合意識は一つの段階もまだ完全に上がっていないことになる。集合規模で発達が進むというのはそれぐらいに時間を要することなのである。

二番目に気をつけなければならないのは、高次の発達段階にも必ず段階固有の限界が内包されており、さらには、高次の段階の特性は未知な点が多すぎるということである。まず、段階固有の限界については、発達という現象は基本的にある段階の限界を乗り越えようとする運動によって引き起こされるものであり、次の段階に到達するというのは、新たな限界を持つ次の段階に移行したにすぎないことを忘れてはならない。つまり、新たな発達段階に到達することは、既存の課題を解決することにはつながるが、また新たな課題と向き合うことを意味しているのである。しかも、次の段階で待つ課題というのは今までの課題よりも複雑高度なものである。

次に、高次の段階の特性がまだ未知な点が多いということにも注意しなければならない。これはよく発達研究者の中でも議論に上るが、発達段階が高度になればなるほど研究対象のサンプル数が減少し、その段階特性に関する議論が推論的なものに陥りがちとなる。個人にせよ、組織にせよ、ティールの発達段階に到達している例は非常に少ない。端的に述べると、研究の領域においても、高次の発達段階を持つ個人や組織が企業社会の中で具体的にどのようにその特性を発揮するかについてはまだ未知な点が多すぎるのである。その中でも特に注意を要するのは、上記の話ともつ

---

ながら、段階固有の限界に関するものであり、同時にその段階が抱える根源的な病理に関するものである。

『ティール組織』という書籍のタイトルにあるように、本書は基本的にティールの発達段階までの記述に留めるという、実に誠実な態度を取っている。実際には、ティールの段階に続いて、ターコイズ、インディゴ、ヴァイオレット、ウルトラヴァイオレット、クリアライトの発達段階が待っている。段階が上昇することに応じて成し得ることは拡大していくが、その段階が直面する課題はさらに複雑高度なものになり、その段階がこの社会の中で具体的にどのように発現されるかは、高度な段階になればなるほど未知である。高度な段階が持つ限界と固有の病理について盲目的になることは危険であり、単純に高度な段階を賛美するようなことは避けなければならない。

三つ目に注意を要するのは、発達測定に関するものである。個人の発達段階を測定する手法については随分と研究が進んでおり、その実用化も進んでいるが、組織の発達段階を測定することは極めて難しい。組織の発達段階は、組織内の人間の数人の発達段階を測定し、それを単純に合算平均するような形で算出されるものではない。すなわち、組織の発達段階というのは、単純に個人の発達段階の総和ではなく、単純な総平均でもないのである。組織の発達段階は、部分の単純総和を超えた一つの全体として現れるものである。このような特徴を持つ組織の発達段階を測定することには、研究者も頭を悩ませ続けている。

『ティール組織』の読者として注意をしなければならないのは、そこで活用されているドン・ベックが提唱したスパイラルダイナミクス測定手法の信頼性と妥当性が極めて低いという点である。これは私が以前在籍していたマサチューセッツ州のレクティカという組織の研究員が明らかにしたものだが、ベックのスパイラルダイナミクスは、キーガンの主体客体インタビュー、カート・フィッシャーのダイナミックスキル理論、スザンヌ・クック＝グロイターのリーダーシップ成熟度モデル、マイケル・コモンズの複雑性階層モデルに比べて、その信頼性と妥当性は極めて低い。そして、他の研究者たちが自分たちの測定手法の信頼性と妥当性を向上させることに努めたこととは対照的に、ベックは発達研究者ではないということから、未だにその測定手法の信頼性と妥当性を向上させるような試みに従事していないという点にも注意を要する。



---

四つ目の点としては、成人発達理論を学び始めた人に陥りがちなのが、段階とタイプを混同することである。おそらく、『ティール組織』を読んだ多くの人が真っ先に行ったのは、身近にいる他者や自らの所属組織、もしくは周りの会社がどの段階にいるかの分析ではないだろうか。その時に、多くの人が段階とタイプは本質的に別個のものであることを理解していないということが問題になる。つまり、発達段階というのは性格類型のようなものではなく、表面的な振る舞いや言動から、ある個人や組織の発達段階を特定することはできないということである。

発達段階の測定方法についてはここで詳しく説明をしないが、その要諦は、発話内容や表面的な振る舞いに注目するのではなく、発話構造と行動の奥に潜む行動論理の特定である。頻繁に見られがちなのは、そうした要諦を無視し、各発達段階の特徴を単に人や組織に当てはめるといだけの行為である。それは発達段階の測定でも何でもなく、単なるタイプ分けに過ぎない。

五つ目の注意点は、発達が持つ領域全般性と領域固有性という特徴についてである。個人にせよ、組織にせよ、多様な発達領域を持っており、一つの測定手法で明らかにすることができるのは、そうした無数にある領域のうちのごく一部であることを忘れてはならない。この点において、スパイラルダイナミクスモデルを活用して、ある組織を一様に一つの段階特性で語ることには大きな問題がある。例えば、ある組織は対顧客においては、実に合理的な行動論理、つまりオレンジの段階特性を発揮するが、組織内の意思決定においては実にアンバー的な行動論理に基づいている場合などもあるだろう。その他にも無数の領域が考えられるが、結局のところ、スパイラルダイナミクスモデルを活用して一様に人や組織の発達段階を語ることは非常に安直であるということだ。

日本の企業社会でこれから成人発達理論の枠組みが用いられる時に気をつけなければならないことは、上記以外にも多々ある。また、上記の一つ一つについては本来もっと丁寧に掘り下げて説明しなければならない。ただし、編集者の方からメールを受けて、日本の企業社会が今、成人発達理論の言語体系を学ぶ初期段階にあり、学習の初期段階というのは極めて重要な時期であるから、走り書きでもいいのでいくつか注意点を列挙してみた次第である。フローニンゲン:2018/2/20(火)

07:58

No.786: Situated Cognition and Cognitive Loads

Probably, situated cognition and cognitive loads are closely linked.

---

---

Our cognition is situated in the environment at that moment, and it would be restricted by cognitive loads that are influenced by environmental affordances. Groningen, 17:38, Wednesday, 2/21/2018

## 2158. 今日の振り返り

今日も気付けば日が暮れて、一日が終わりに差し掛かっている。午前中に日本企業との協働プロジェクトに関するミーティングを行い、午後からは共著で執筆中の書籍の原稿を読み返していた。また、以前リクルートマネジメントソリューションズさんの企画である大人の学びプロジェクト(通称「オトマナ」プロジェクト)で中竹竜二さんと対談をさせていただいた時の対談原稿に修正を加えることを行っていた。そうしたことを行いながら、自分の研究を前に進めるために、時系列データ分析に関する“Introductory time series with R (2009)”という専門書を最初から最後まで一読した。本書で掲載されている数多くの数式に圧倒されることはなく、むしろ解説文が充実していたためか、各章を食い入るように読み進めることができた。

本書で掲載されている手法のいくつかは、早速金曜日のインターンの際に活用しようと思う。本書を読みながら気づいたが、自らの感情が動かされる書籍や論文を読んでいくことがいかに大事かということである。

学習とは感情が動かされることによって初めて実現されるものなのではないか、ということと思う。学びというものがある段階から次の段階に向かっていく運動であるならば、その運動を推進するのは学び手の感情なのではないだろうか。

とにかく私は、自分の感情が動かされない書籍や論文を読まないようにする。そうしたものに目を通すことは、自らの感情が動かされないがゆえに、死物と化した学びだと思う。この点と密接に関係して、著者の実存性が感じられる書物や論文を中心に読んでいくことも大切になるだろう。文献の中に著者の呼吸と鼓動が感じられないようなものを読む意義はどこにあるだろうか。文献を通じた学びには、必ず触発のようなものが必要であり、それを死物と化した文献から得ようとするのは至難の技だろう。

---

今日も改めて、学びに関する基本的な事柄、すなわちアウトプットの重要性について考えていた。本日、Rを用いた時系列データ分析の手法について書かれた専門書を読んでいた時、それを早く実際の自分の研究の中で適用してみたいという気持ちと、実際にそうした実践をしてみなければ真の知識は獲得されえないことを考えていた。

その専門書を読むことはインプットであり、本来であればインプットをするたびごとに振り返りを行うことが必要なのだろう。しかし、実際に自分でその知識を活用してみなければ、私の場合はそうした振り返りを行うことが難しい。当然ながら、書物の内容によっては、記載内容から得られた考えなどをすぐに文章の形にすることはある。しかし、それは思っている以上に実行することは難しい。

私に合った振り返りは、やはり知識を活用した実践の都度に行う振り返りなのだろう。また、何かアウトプットを生み出した都度、それについて振り返りを行っていくということも自分に合っている方法かもしれない。そのようなことを考えながら今日を振り返っていた。フローニンゲン:2018/2/20(火)  
19:39

#### No.787: The Difficulty of Expression

What do I want to express? What do I want to tell?

The difficulty is almost the same in my academic research and music composition. The intricacy of expression might be universal in any domains. Groningen, 21:42, Wednesday, 2/21/2018

#### 2159. 時の顔

先ほど夕食を摂り終え、これからRを用いたネットワーク分析に関する専門書を読み進める。本書は夏あたりに購入していたものだと思うが、ようやく落ち着いて読む時間を持てた。

ネットワーク分析を発達研究に活用することはもう少し先のことになるかもしれないが、ネットワーク科学、とりわけネットワーク分析の手法に関しては強い関心があり、時に居ても立ってもいられなくなり、ふと専門書に手が伸びてしまう。これはシステム科学におけるシステム分析に関しても同じである。

---

昨日、インターン先のオフィスにいる時、ネットワーク科学とシステム科学への関心の強さから、それぞれの領域に対して一つずつ博士号を取得してもいいのではないかと思っていた。前者に関しては、ハンガリーのブダペストにある大学が非常に優れた博士プログラムを持っており、後者に関しては米国のポートランドにある大学が魅力的な博士プログラムを持っている。何年かかっても良いので、それぞれの領域で一つずつ博士号を取得したいという強い衝動に駆られていた。

そうした思いにさせているのは、両分野が持つ豊穡な概念体系と数々の分析手法の存在だろう。両分野の概念と分析手法は、この現代社会の様々な領域、私が携わる領域で言えば企業社会や教育の世界の問題の解決に対して極めて大きな力を持つものだと考えている。

ネットワーク科学とシステム科学の中にある特殊なモデリング技術は特に私の関心を強く引きつけている。それらの分野を博士課程に行って学ぶという意思是今後も常に持ち続けていたいと思う。

昨日のインターン先のオフィスでは、ずっとスメタナのピアノ曲をかけていた。その前の時はハイドンのピアノ曲をずっと聴いていた。

ずっと同じものを求め続ける自分と絶えず新たなものを求めようとする自分。保身と革新は人間の性なのだろうか。

日々変わらないものを追い求めながら、日々新たなものに向かっていこうとする自分。そうした二つの両極性の中で一日を形作っていくことは、人間に宿命付けられていることなのかもしれない。

「時(とき)」が駆け足をしているかのように、時間は私の人生の中を過ぎていく。歩いている「時」、止まっている「時」もあるが、今は駆けている「時」を実感することが多い。そんなことを早朝に思っていた。

様々な顔を持つ「時」。時について思いを馳せると、それが持つ豊かな表情に対してハッとさせられる。今この瞬間に流れている時は、どのような表情を持っているだろうか。朝は駆けていく時だったのに、辺りが闇に包まれた今の時は、どこかゆっくりとくつろぎながら、明日に向けての準備をしているかのようだ。フローニンゲン:2018/2/20(火) 19:58

I can feel time both passing and accumulating within me. Even if daily practice looks tiny, it may be regarded as huge practice in that it can lead to a gigantic construction someday. Groningen, 08:53, Thursday, 2/22/2018

### 2160. 今朝方の夢と今日の活動

どこの国籍かは不明だが、英語がネイティブであろう一人の男性が、波止場で一人の女性に結婚の申し出をしている場面に夢の中で出くわした。

どうやらそれは現実の結婚申し出ではなく、ドラマか何かの撮影らしい。一度目の撮影が終わった後、女性は男性に向かって、「あなたの顔、怖いわよ」と笑いながら述べていた。男性の演技はどうかやら鬼気迫るものがあつたらしく、結婚の申し出の瞬間の彼の顔を見ると、確かにおっかない表情をしていた。

今朝方の夢には、その他にも大切だと思われる場面があつたことを覚えている。しかし、それは身体感覚的に覚えているだけであつて、言語化できるほどの記憶の鮮明度はない。昨日の朝方に見ていた夢も同様だったように思う。

今日はいつもより遅く起床し、七時を過ぎてから一日の活動を開始させた。今日は午前中に、「デジタルラーニングと学習環境」のコースの第三回目のクラスに参加する。その後、このコースのグループ課題を一緒に取り組んでいる友人のハーメンとランチミーティングを行う。ハーメンと私は、コースの課題グループが同じだけではなく、現在取り掛かっている研究についても同じアドバイザーを持っている。そのため、前の学期は頻繁に、アドバイザーのミハエル・ツシヨル教授とハーメンと私とで、学内のカフェで研究のミーティングを行っていた。今学期からは、どうやらツシヨル教授との個別ミーティングとなるようだ。

前の学期までは、研究計画書の執筆や研究の進め方など一般的な指導を受けたが、研究計画書が提出され、これから本格的に研究が始まる段階を迎えてみると、研究の個別性ゆえに一对一のミーティングの方が良いとツシヨル教授が判断したのだろう。

---

来週の木曜日にツシヨル教授と学内のカフェでミーティングをすることになった。このミーティングが個別であるおかげもあり、今取り掛かっている研究の話のみならず、六月にロンドンで行われる学会発表の資料に関しても助言を得ることができる。

次回のミーティングでは、研究インターンを通じて収集したデータをもとに、実際に二人でその場でプログラミングコードを書きながらデータ分析をあれこれ行ってみることになっている。昨日、エクセルに収められたデータをcsvファイルに変換し、それをツシヨル教授に送った。

当初の予定では本日の午後にミーティングを行うはずだったが、ツシヨル教授の仕事の兼ね合いもあり、ミーティングは来週に延期された。そのおかげもあり、今週の金曜日のインターンの際に、私の方で事前にRを用いてあれこれと探索的にデータ分析ができる。その結果を報告し、その他に分析の観点がないかどうかについて意見交換をしようと思う。今日もとても穏やかな朝だ。フローニンゲン:2018/2/21(水)08:04

No.789: Ahh

“Ahh” embraces various meanings and flavors. How is your ahh today? Groningen, 09:02,  
Thursday, 2/22/2018